

羅末麗初における中国語学史資料としての 海東禪師塔碑銘について

『長田夏樹論述集（上）』第19章
（原載：『神戸外大論叢』第15巻第3号，1964年9月）

この論文は、朝鮮半島の金石文のうち、新羅末期から高麗初期、具体的には新羅第46代の文聖王（在位839-857）より高麗第11代の文宗（在位1046-1083）までの約250年間に於ける禪宗関係の碑文を紹介し、その中国語史料としての価値を論じたものである。

著者は朝鮮半島における禪宗の受容とその系譜をたどりながら、朝鮮総督府編『朝鮮金石総覧』（1919年，国書刊行会及び亜細亜文化社のリプリント版あり）に見られる羅末麗初期の禪師顕彰碑文30種を挙げ、そのうち（11）砥平弥智山菩提寺大鏡大師玄機塔碑（939年4月）、（16）忠州開天山浄土寺法鏡大師慈燈塔碑（943年）、（18）寧越師子山興寧寺澄暁大師宝印塔碑（944年6月）、（24）驪州慧目山高達寺元宗大師惠真塔碑（975年）、（26）忠州開天山浄土寺弘法国師実相塔碑（1017年）の5碑に問答体の部分が含まれることを指摘している。そして、そこに“爲什勿”、“作摩生”、“与摩”等の語彙が見られることから、こうした問答体の部分は中国語の口頭語をできるだけ忠実に表記したものであり、口語語彙の用法・用字法の上限下限を定める貴重な資料になり得ると説いている。なお、本論文にはそのケーススタディとして、（26）弘法国師碑の移録と（18）澄暁大師碑の訳注（いずれも部分）が含まれている。

言うまでもなく、こうした碑文資料に着目した著者の意図は、これらを五代南唐の静・筠二禅僧により広順2年（952）に成ったものの、入蔵されることなく朝鮮半島に渡り、高麗の高宗32年（1245）大蔵経の補版として刊行された『祖堂集』の同時代資料として位置付けるところにあったと思われる。元代白話碑の中国語史料としての価値にいち早く注目した著者ならではのユニークな着想と言えよう。

『祖堂集』をはじめとする禅語録の研究は、すでに中国語語彙語法史の分野において確固たる地位を占めており、その研究論著も汗牛充棟であるが、朝鮮半島における禅宗関係碑文を正面から扱った研究、ましてやその中国語史料としての価値に着目した研究は、おそらく本論文を措いて存在しない。著者が開拓したこの分野の研究は、後学の我々にその進展が託されていると言える。

（竹越孝）